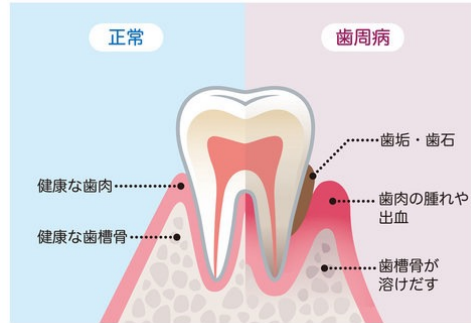


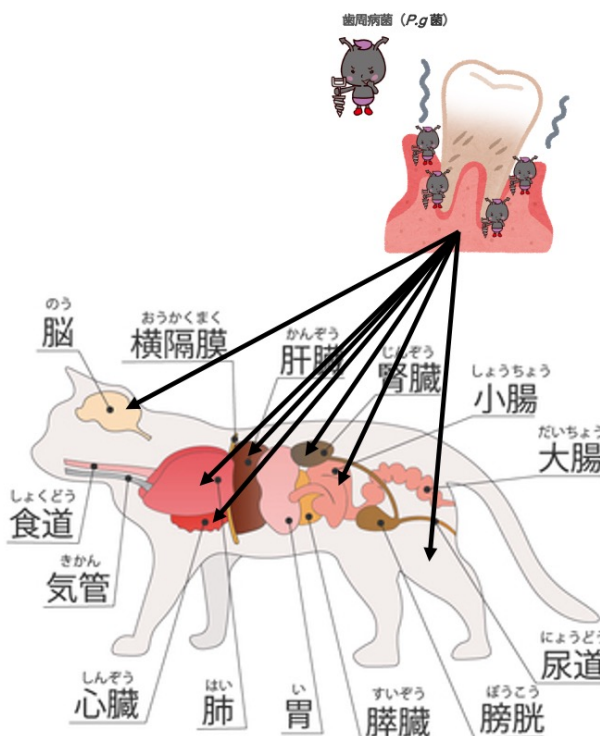
歯周病について

歯周病は全身に様々な悪影響を及ぼします

歯周病は、歯周病を引き起こす細菌（歯周病菌）の感染によって引き起こされる歯茎の炎症性疾患です。歯と歯茎の境目（歯肉溝）に歯垢が蓄積すると歯周病菌が増えやすい環境になります。歯周病菌が増えることによって炎症が起き、歯肉の発赤、腫脹がみられるようになります。歯周病が進行し、慢性的な歯周病になると、歯と歯茎の境目（歯周ポケット）が深くなり、歯を支える骨（歯槽骨）が溶けて歯がグラグラ動くようになり、最終的に歯が抜け落ちてしまいます。



人における慢性的な歯周病は、歯周病菌やその菌が産生する毒素(内毒素)、さらに炎症性物質などが歯周病の歯茎の毛細血管を通して全身の組織に送られ、それぞれの組織で悪影響を及ぼすことで様々な病気を悪化させたり引き起こしたりすることが明らかにされています。特に、心臓疾患や脳血管疾患、糖尿病などに加えて、ガンの発症リスクも高まることが指摘されています。また、唾液に含まれる細菌が誤って気管支、肺に入ることによって気管支炎や誤嚥性肺炎を引き起こすことも知られています。そのため**ペットの歯周病においても、体に対する悪影響は人で明らかにされている事と同等のリスクが危惧されています。**



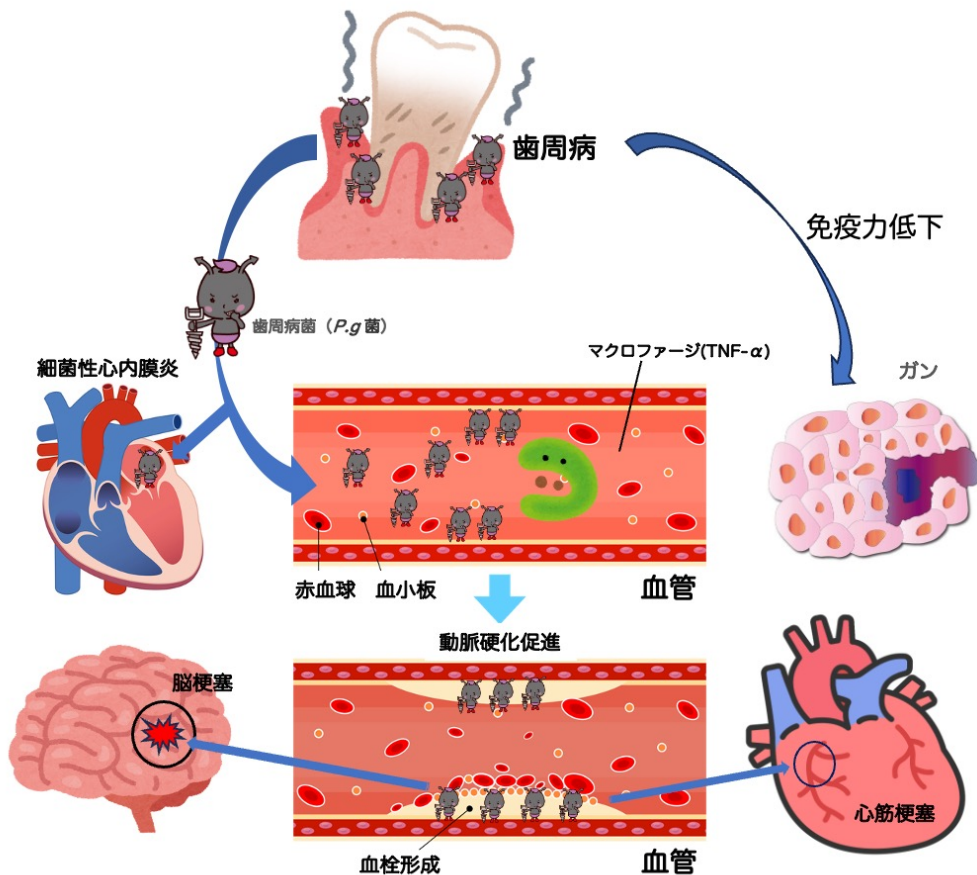
歯周病は全身に様々な悪影響を及ぼす

歯周病と心臓疾患・脳血管疾患・ガンとの関わり

歯周病の原因は、歯垢と呼ばれる細菌の塊です。歯垢は、歯磨きが不十分な部分に付着するネバネバした粘着物です。この歯垢は時間とともに量が多くなり、その中は酸素が少ない状態になるので酸素を嫌う嫌気性菌が歯垢の中で多くなります。特に、嫌気性菌の中で歯周病を引き起こす中心的な原因菌が、*Porphyromonas gingivalis* (ポルフィロモナス ジンジバリリス)という細菌(*P.g* 菌)です。*P.g* 菌は“ジンジパイン”というタンパク質分解酵素を分泌し、歯肉に攻撃を仕掛けて身体の中に侵入しようとします。これに対して、身体は菌をやっつけて侵入を抑えようと攻撃します。これが歯周病のはじまりで、歯肉からの出血・発赤・腫脹などの炎症の症状を引き起こします。

この歯周病が慢性的な炎症になることで、*P.g* 菌が血管内に入り込み、心臓に到達します。そこで、*P.g* 菌が心臓の弁や内膜にとりついて感染が起きると、心内膜炎を引き起こします。また、*P.g* 菌が心臓の血管に付着して血栓を形成すると、血管が狭くなり、さらに、血管内皮に傷が入ることで動脈硬化をおこし、狭心症や心筋梗塞の発症リスクが高まります。この動脈硬化は心臓だけでなく、全身のあらゆる血管でおこる可能性があり、脳梗塞などの発症リスクも高くなり、歯周病の人はそうでない人の2.8倍脳梗塞になり易いと言われています。

また、慢性的な歯周病は免疫系の機能を低下させます。歯周病による免疫系の機能低下が、ガンの発症リスクを高めることが報告されています。

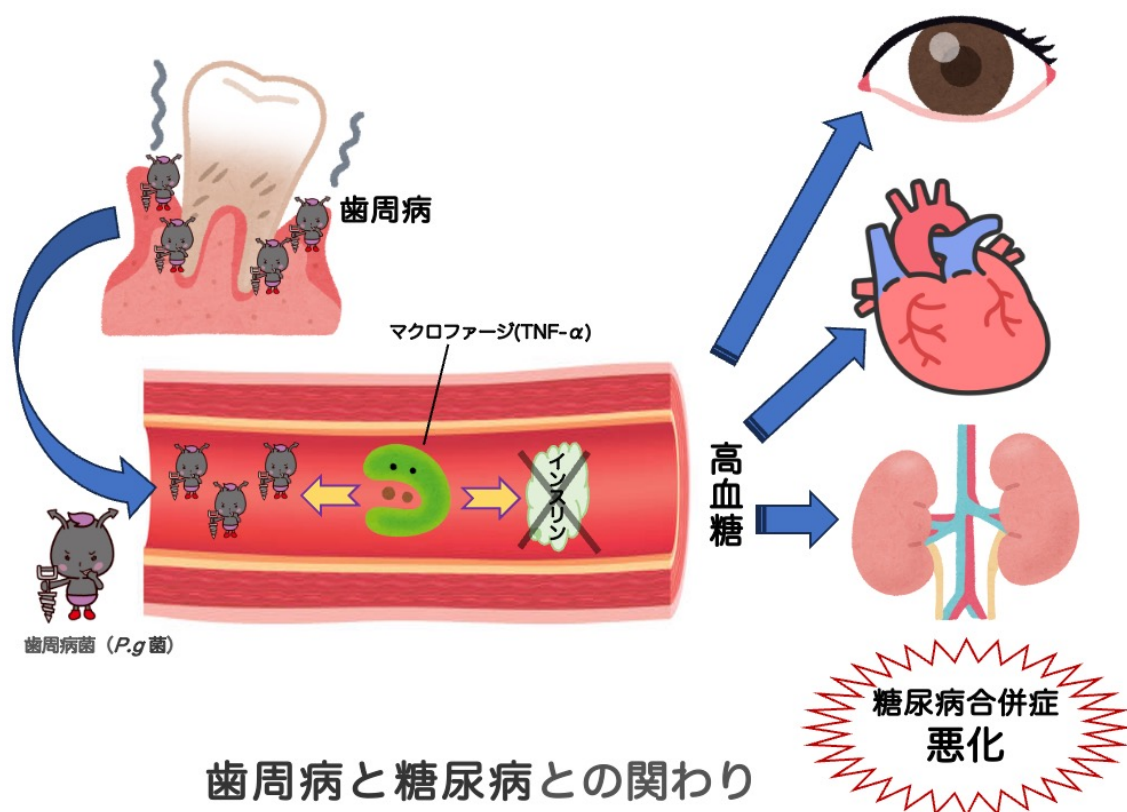


歯周病と心臓疾患・脳血管疾患・ガンとの関わり

歯周病と糖尿病との関わり

慢性的な歯周病においては、歯周病菌(*P.g* 菌)由来の毒素(内毒素)や炎症性反応物質が血液を通して全身を巡ります。血液中の内毒素は、血液中のマクロファージや脂肪組織、筋肉、肝臓などからTNF- α の産生を促します。TNF- α は、血液中の糖分の取り込みを抑える働きがあるため、血糖値を下げるインスリンの働きを弱めてしまいます。そのため、歯周病を合併した糖尿病の人は、糖尿病が悪化するだけでなく、糖尿病の悪化による合併症(網膜症、腎臓病、神経障害など)の発症リスクも高まります。

この様に、歯周病と糖尿病には密接な関係があり、お互いが影響し合っているといわれています。この事から、歯周病を予防することで、糖尿病の発症リスクを低減できると考えられています。



歯周病と糖尿病との関わり

歯周病はペットの健康寿命を縮めてしまいます

歯周病を予防して「ワンちゃん」「ネコちゃん」の健康寿命を延ばしましょう